



Boy and Bride # 1, 2011
“Wedding up in Heaven” より



Wedding up in Heaven # 8, 2011
“Wedding up in Heaven” より

展評 瀧澤明子個展「Over the Parched Field」

開催：2012年1月18日～3月1日 於ロンドン 日英大和基金ジャパン・ハウス

幼くして命を落とした子どもの霊が、年頃を迎えるとき、あの世で寂しがる故人を想って架空の結婚式を挙げる。子どもの遺影と、伴侶となる婚礼人形(左上写真)。ケースにはラベルが貼ってあり、新郎の名前と没年月日が記してある。こうして再び供養された何百もの遺影と人形の奇態なカップルが、花嫁堂に納められている。青森県五所川原の川倉賽、津軽三十三霊場の一つだ。

埃立つかざり棚の上で結ばれ、永遠に歳をとらない夫婦たちが、Wedding up in Heaven #8(右上写真)では、次々と津軽の曇天に放たれる。若さに閉じ込められ所在をうしなした故人の像が、結婚を機にまた喜々として老い始める。空に消えかかると捉える第二のフレーム(本作品)が、観る者を、死—結婚—空の、歴史の断層に迷い込ませる。

「天上の結婚式」なんて、少しきれい過ぎはしないか。と、斜に構えてみるのだが、それでも消えない魅力があり、改めてBoy and Bride # 1を眺めていると黙り込んでしまう。強すぎる構成と重すぎるテーマを軽妙にくずして、無関心がぽっかり浮かんでいる。とても、マジメでちっともスカしていないが、親戚の家でいとこの写真を見るように、平然としている。そう感じさせるのは、レンズと被写体との奇妙な距離感ではないか、と思う。

きっと、わたしはこの感覚を知っている。自分を客体化した果てに先にいきつくある感覚。人ごみに体をさらわれて、心だけが置いてきぼりになった空ろな感覚。だが、写真家はもっと遠くにいる。「身体之ズレ。体と頭がバラバラ。壊れた物イコール自分」*という。しかし、この「壊れた」感覚は、彼女にとってはあまりに当たり前の事実なのかもしれない。自分が自分でないような離人症の感覚が、無邪気でリアルな夢をみせる。

「小さい時に死にそうになった。その時に、モンシロチョウと器械の夢を見た。魂の象徴がもやもやしたものでなく、器械の方はしっくりきた。モンシロチョウは身体、器械は魂。壊れたものの姿は本来の姿。壊されてしまった物の場所。」*

死、機械、壊れたもの — 都合のいい用語を弄していかようにも解釈できるだろうが、紙面がもったいないのでやめておく。ただ、この話を聞いた時、言葉の喚起するイメージの強さに、身の毛がよだつた。彼女の作品に現れるのは、そんな生理的なリアリティーだが、それが時にロックに、時にポップに、あるときはさながら民謡のように表れでる。

瀧澤明子の作品の背後に現れるのは、バラバラになった少女の疲れきった感性だ。十代に啓示された感覚をひたすら追い求め、今日、彼女はこの時代の感性を確実に所有している。ロンドンでの初個展は、「Over the Parched Field」と名付けられている。芭蕉の辞世の句、一旅に病んで夢は枯野をかけ廻る一の英訳の一説だ。ここに民族の真情をつく、歴史の悲しいアナロジーがある。

瀧澤明子 1971年、福岡生まれ。2006年、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)で修士号を取得。写真だけではなく映像やパフォーマンスアートをとりいれ、2006年 Bloomsburg New Contemporaries に選ばれる。第29回ひとつぼ展入選。

*アーティスト対談より、ロンドン北東、アーティスト・川上幸之介氏の自宅で。2012年1月28日。